

【クレーム情報】

皮革飾りからの色泣き

今回は、同じような事例で皮革飾りからの色泣きを紹介する。
皮革は、染色の弱いものが多いため、付属品に使われている場合には、特に注意が必要となる。

原因

飾りに使用されている皮革の染色が不堅ろうであったため、クリーニングでの処理により染料が溶け出して周辺の生地を汚染したものの。取扱い絵表示では、水洗いを禁止して、石油系溶剤でのドライクリーニングを可としているが、染色状態をチェックした結果では、水および石油系溶剤のいずれに対しても堅ろう性がなく、染料が溶出することが確認できる。

事故の防止対策

製造メーカーは、染色の弱い皮革の使用を避けること。

染色した皮革飾りなどを組み合わせた製品のクリーニングを依頼された場合には、水洗い、ドライクリーニングのいずれにおいても染料が溶け出すことを前提に、使用する洗剤や溶剤に対する染色の堅ろう度をチェックして、堅ろう性に問題がある場合には顧客にその旨を伝え、処

理を断るなど適正に対応すること。

皮革の染色

皮革の染色が堅ろう性に欠け、クリーニングで色泣きなどの問題が生じるのは、染色工程に次のような要因があるため。

- 衣類に使用する皮革は、皮革の内部分まで均一に染色する必要があること
- から拡散性の高い染料が用いられる。しかし、拡散性の高い染料は皮革との親和性が低いために、十分な堅ろう度を確保できない傾向にある。※皮革の内部まで均一に染色するのは、外部に露出する皮革の切断面も、同色になるようにするため。
- 皮革製品は風合いを重視するため、高温での染色が実用化されていない。クロムなめし等により高温に耐える皮革もあるが、こうした皮革であっても高温での染色は風合いを悪化させることになる。
- 繊維製品のように染色後に余分な染料を洗い落とす工程（ソーピング）を十分に行えないことがある。

このほかにも、皮革を使った製品は、個体や裁断する部位が異なる皮革を集めて1着の縫製品とするため、クリーニング前には目立たない品質の違いなどが、クリーニングすることによって色や風合いの変化となって現れてくることがある。

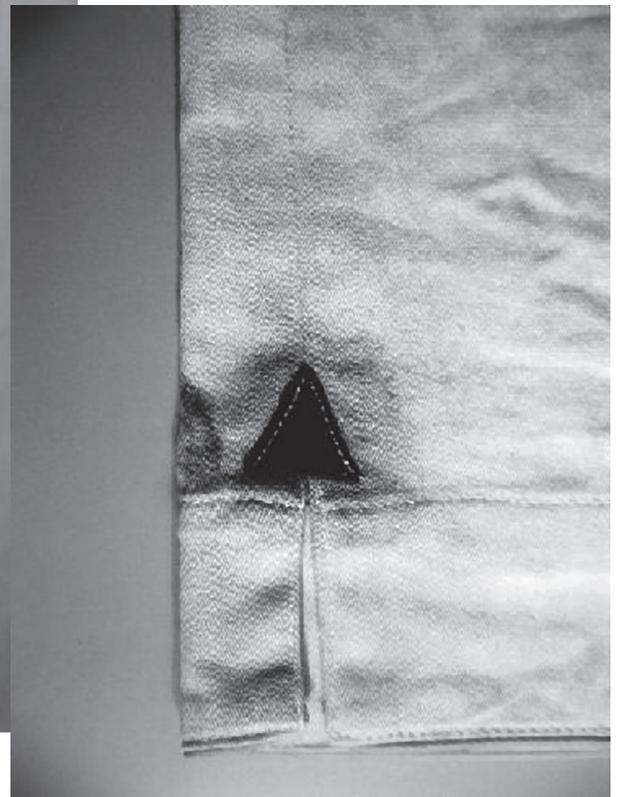
事故防止システムで検索

日本繊維製品・クリーニング協議会が運営する「クリーニング事故防止システム」で皮革製品に関する事故を検索すると、8月26日現在で登録されている事故情報44件が確認できる。このうち色に関するトラブルは15件で、染料の移染・色泣きが9件、紫外線の作用による色の変化が2件、残る4件は皮革の特性によるところの自然発生的な色の変化となっている。

クリーニング事故防止システムでは、こうした色の変化以外にも、天然皮革に特有の様々な変化が確認できる。

クリーニング事故防止システムの利用には、日本繊維製品・クリーニング協議会への入会が必要です。詳細は、日本繊維製品・クリーニング協議会事務局にお問い合わせください。

TEL. 03 (5362) 7201



ズボンの裾にあしらわれた皮革飾り。
本体の綿生地を、皮革からの紺色の染料が汚染している。

- 事 故 品 名…婦人ズボン
- 素 材…本体・綿、裾の部分に紺色に染色した三角形の皮革飾りが付いている。
- 取扱い絵表示

- 処 理 方 法…石油系溶剤でのドライクリーニングを行った後、ウェットクリーニング処理。
- 事 故 の 状 態…紺色に染色した三角形の皮革飾りから染料が溶け出し、飾り周辺の生地を汚染したような状態になっている。